司会　皆さま、大変お待たせいたしました。ただ今より文化庁、平成28年度文化芸術創造都市推進事業自治体サミットを開催いたします。本日は、これからの文化プログラムの全国津々浦々での実施に向け、自治体における文化プログラム推進に向けた機運の向上を図るために開催するものです。なお、本サミットは東京2020文化オリンピアード事業としても開催いたします。

　早速、本日のプログラムに入ります。初めに主催者を代表いたしまして、宮田亮平文化庁長官よりご挨拶を申し上げます。宮田長官、よろしくお願いいたします。

宮田文化庁長官　宮田でございます。このCCNJの自治体サミット、大変素晴らしいサミットになると感じております。何しろついにリオデジャネイロが終わりました。これからは、文化プログラムによって世界に日本が何であるかということを改めて知ってもらう、より詳しく知ってもらう、その意識を皆様にも持っていただきたいと私は思っております。

　先日、村上さんが受賞するだろうと10年来思われてきた、あのノーベル文学賞、なんとボブ・ディランさんがとりました。『風に吹かれて』は1963年でした、しびれましたね。ちょうど私はあのとき高校3年生。あの時代、あの混沌としたベトナム戦争もありました。いろんなことがあった時代に歌が伝える、歌詞が伝える、その言葉に、われわれが新たな力を生み出すことができたということに対して、この文化というものの深さ、人間が生きるという意味での力、そういうものをしっかりと感じることができたことを、私は実感として感じております。

　文化だけでは一輪車。観光だけでも一輪車。二つ合わせれば二輪になります。二輪は走らなければ倒れます。そこにしっかりと経済を結びつけることによって、三輪車ができます。三輪車は止まって、深く未来を考えても安定しています。ダッシュをすれば、どこまでも山を越えて遠くへ行くことも可能でございます。そういう意味では2020を迎えるにあたって文化が、その三輪車のハンドルとなるべきであると私は思っております。今回のCCNJの自治体サミットが、新たな行動の一歩となってくれることを期待しております。

　京都市をはじめとしまして、名だたる市長の皆さまにおいでいただいております。この後のサミットが、実に実のあるものであり、2020を超えて、先ほども申しましたけども、本当に心に残る日本の文化を世界に発信することを期待いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。今日のシンポジウムの成果に大いに期待を致しまして、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

司会　宮田長官、ありがとうございました。

　続きまして、開催地の挨拶といたしまして、山田啓二京都府知事よりご挨拶を申し上げます。なお、本日は山田知事が他のご公務の都合によりご欠席のため、山内修一副知事より代読させていただきます。山内副知事、よろしくお願いいたします。

山内京都府副知事　皆さま、こんにちは。本当に大勢の皆さまがお集まりになられまして、2020年に向かい、東京オリンピック・パラリンピックに向けたスポーツ・文化を中心とした大きなムーブメントをこれから起こしていこうと本日からスポーツ・文化・ワールド・フォーラムが開催されたところであります。その一環として、ただ今、素晴らしい長官のご挨拶がありましたけれども、創造都市ネットワークの皆さま方によります自治体サミットが、このように開催をされますこと、本当に喜ばしく思っているところであります。

　知事も本当に、出席したかったのですが、急遽午後から別業務が入りましたので失礼をさせていただいておりますので、私のほうから、ご挨拶を申し述べさせていただきます。

　創造都市ネットワーク日本 自治体サミットがこのように盛大に開催をされますことをお喜びを申し上げますとともに、皆さま方に歓迎を申し上げたいと思います。本サミットの開催にご尽力をいただきました宮田文化庁長官、そして門川京都市長をはじめ、創造都市ネットワーク日本の幹事団体皆さま方の今日までのご尽力に敬意を表する次第であります。

　長官からもございましたけれども、それぞれの地域で育まれてきました文化・芸術は、ある意味で地域の絆と、そのアイデンティティーを高め、さらなる活力を生む力を秘めていると思っております。このような中、国内および世界の創造都市間の連携交流を促進するプラットフォームでありますCCNJの活動は、地方創生が叫ばれている中、ますます重要性が高まっていると思っております。参加自治体も平成25年の設立時から4倍以上に増え、文化芸術団体やNPO法人等も含めますと100団体を超えると伺っておりまして、大変心強く感じているところであります。

2020年にはスポーツだけではなく、文化の祭典でもあります東京オリンピック・パラリンピックが開催されますけれども、まさに創造都市、あるいは創造農村といった皆さまの力を発揮する絶好の機会だと思っております。この後、各自治体の文化プログラムに向けました取り組み等が紹介をされると伺っておりますが、東京オリンピック・パラリンピックに向けまして、文化の創造力を存分に発揮した、文化プログラムを実施していただけますように、このサミットが今後一層連携を深めていく契機となって、実り多きものを生み出すことを期待しております。

　京都府におきましても「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」をキックオフとして、オール京都で日本文化の真髄を国内外に発信をする「京都文化力プロジェクト2016-2020」を展開していきたいと考えており、日本文化の素晴らしさを積極的に発信するとともに、その精神と伝統のもとに新しい文化をぜひ創造してまいりたいと考えておりますので、引き続き皆さま方のご支援をお願い申し上げる次第であります。

　結びに当たりまして、創造都市ネットワーク日本のますますのご発展と、本日ご来席の皆さま方のご健勝とご多幸を祈念申し上げまして、併せてこの会の成功を祈念し、挨拶とさせていただきます。

司会　山内副知事、ありがとうございました。続きまして、門川大作京都市長より、ご挨拶申し上げます。門川市長、よろしくお願いいたします。

門川京都市長　ようこそ皆さま、京都にお越しいただきました。宮田長官はじめ、佐々木室長、またそうそうたる創造都市のお取り組みを進めていただいている皆さま、ありがとうございます。

　宮田長官、三輪車の話、ありがとうございます。ともどもに、皆で頑張っていきたいと思っています。

　私は先ほどから50年前の東京オリンピックを思い出していました。中学生でした。テレビにかじりついて見ていました。しかしオリンピック・パラリンピックがスポーツの祭典であるけど文化の祭典である、このことは私も含めてあんまり認識がなかった、しかも全国津々浦々で、文化で日本を元気にしていこう、スポーツと文化で各都市が、国民全体が世界とつながっていこう、こんな取り組みには、50年前はなっていなかった。今回はそうしたときに文化庁が大きな役割を果たしていただき、さらには創造都市の取り組みを主体的にされている皆さまがたが、地方創生も含めて取り組まれていることに敬意を表したい、このように思います。

　そして文化庁の全面的な移転ということが決まったわけですけれども、これも地方創生の大きな取り組みの一貫であります。文化で全国津々浦々を、日本中を元気にする。まだデフレ経済が克服できてない日本だといわれています。経済の分野でデフレーションと、人の心、内向きになる、デプレッション、語源が一緒だというふうに聞いております。経済を活性化する、それには文化で人々が元気になる、文化で地方が元気になる、このことが経済の活性化になる。まさに経済と文化と観光、この三輪車が、まさに一元化されたときに日本が元気になる、そのように思います。その先頭に創造都市があって、どんどん元気になる。そして日本中を元気にする。そんな取り組み、ともどもに進めたいと思います。お集まりの皆さまに、ご尽力の皆さまに、改めて敬意をし、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

司会　門川市長、ありがとうございました。

　なお、山内副知事は他のご公務がございますので、ここで退席させていただきます。

　では、ここからの進行はCCNJ顧問、文化庁、文化芸術創造都市振興室長の佐々木雅幸様にお願いしたいと思います。佐々木様、よろしくお願いいたします。

佐々木氏　佐々木です。本日は短い時間ですが、スポーツ・文化・ワールド・フォーラム、2020に向けたキックオフという非常に大事な日に当たりまして、全国各地からご参加いただきましてありがとうございます。

　早速CCNJを代表する形で５つの都市、自治体の市長さんからご発表いただきたいと思います。現在、CCNJは82都市のネットワーク、そして29団体、合わせますと100を超えるところまで成長していましたけれども、文化庁では2020までに170ぐらいにしたいと思っておりまして、本日お話しいただく市長さんたちは、その先頭に立って進んでおられるということでございますので、短い時間ではございますが、それぞれ力のこもったメッセージをいただけると思います。

　それでは、最初は現在のCCNJの代表幹事をされております新潟市長、篠田昭様からお願いいたします。よろしくお願いします。

篠田新潟市長　皆さま、こんにちは。新潟市です。新潟市は本州日本海側のセンターに位置する、日本のウエストコーストシティーと呼んでいただきたいと思います。平成の大合併で15市町村が一緒になりました。合併した市町村の中には、数千人の村もあった中で、一気に81万人のまちになりましたが、新しい新潟市はどんなまちかよく分からないということで、われわれもこのアイデンティティーをどこに求めるべきか考えました。行き着いたのが、港町、それを囲む日本一の美田地帯が、日本一の大河である信濃川と、それに匹敵する水量を持つ阿賀野川という、二つの母なる川から育てられている、それらが共通しているということで、日本一大量の水、そして多様な土から生まれたのが、わが新潟市だということをアイデンティティーに定めさせていただきました。

　水と土の芸術祭というものを2009年に始めて、2012年、そして昨年と3回開催をさせていただきました。また新潟はフランスのナント市と姉妹都市ということで、ラ・フォル・ジュルネを開催しております。また、この写真はみなとぴあという歴史博物館、そこにプロジェクションマッピングを投影しております。これは昨年、今年の2回、国際コンペティションを新潟市で開催いただきました。またNoism、これはりゅーとぴあという劇場の専属ダンスカンパニーです。プロのダンスカンパニーを持っているのは新潟市だけです。

　このようなことを取り組んでおりましたら2012年に文化芸術創造都市部門で文化庁長官表彰をいただき、そして昨年、東アジア文化都市に選んでいただきました。一昨年から始まって、一昨年が横浜、そして今年は奈良市さんがおこなっていらっしゃいます。

　今年の9月には、アーツカウンシル新潟を設立いたしました。これも文化庁さんから横浜市と並んで補助事業を採択いただいたということで、さきほどの三輪車の話もありましたが、これからは、このアーツカウンシルと行政が両輪となって、2020に向けて取り組んでいこうということでございます。

　そのキックオフイベントという形でBeijing、Seoul、Tokyoの頭文字をとって名付けられたBeSeTo演劇祭を新潟市で開催し、これが2020応援文化オリンピアードということで組織委員会より認定を受けました。今後も、このアーツカウンシルをフルに活用して新潟の多彩な文化により磨きをかけて、新潟の水と土の文化、水と土の環境、より良いものにして後世に伝えていこうと考えております。

　ここまでは勝手なことを申し上げたのですが、最後、代表幹事として言いますと、これから創造都市の基盤、これを推進、支えていくためには、CCNJにさらなる役割が期待されているということだと思います。新潟市も今、代表幹事という立場でございますので、会員の皆さまと共に加入自治体、団体、これをさらに増やしながら、国内外の都市間連携、交流をさらに促進すると同時に、各地域が取り組む文化プログラムや文化資源の発掘、磨き上げ、これを支援できる、そんなCCNJに育っていきたいと思いますので、皆さまからのご協力をお願い申し上げまして、代表幹事としてのご挨拶も兼ねてさせていただきました。ありがとうございました。

佐々木氏　どうもありがとうございました。篠田市長は、この後の分科会のほうでも、またご登壇されて、そのときはもっとゆっくりしゃべられると思います。

　今、お話があったように、文化庁が考えておりますアーツカウンシルを各地域につくっていき、それが文化プログラムを動かしていくということで、新潟市には真っ先に、この補助事業に手を挙げていただいております。横浜市、新潟市は、それぞれ東アジア文化都市、1年目、2年目という形で日本の全体の動きもリードしていただいて、大変ありがたく思っております。引き続き、篠田市長にもリーダーシップを発揮いただけるということなので、よろしくお願いしたいと思います。

　それでは、次は可児市長の冨田成輝様にお願いいたします。

冨田可児市長　皆さま、こんにちは。岐阜県可児市の冨田と申します。カジでもカゴでもなくカニと読む、未来の可能性をいっぱい秘めた児童、子どもの育つまちと、そういう意味でございますので、これを機会に、ぜひカニと覚えていただくと大変ありがたいと思います。

　真ん中に可児市文化創造センターalaがございます。これは可児市の文化の拠点であり、市民の最も誇りとする空間でございますが、実はここに集まっていただく芸術家の皆さまが、この劇場を飛び出して、まちづくりに活動していただいております。例えばこの左の上、特別養護老人ホームへ行って、バリアフリーダンスを通じて皆さまに笑顔を届けるという取り組み。或いは、これは今の可児市も高齢化と同時に子どもさんがたが大変増えておりまして、未満児を育てる若いお母さんたちのところへ行って、これも踊りを通じて仲間づくりをしていただくというプロジェクト。それから多文化共生プロジェクト、可児市は製造業が盛んで、そこで働く外国の方が多くおられます。特に特徴は、岐阜県には外国籍の児童生徒が2千人いますが、そのうちの2割を超える450人が可児市にいます。外国人の持ち家率が20％を超え、永住希望が50％です。可児市に住みたいという、将来可児市の産業を支える外国籍の子どもたちをみんなで育てようということで、外国籍と日本人の方が一緒になって演劇をつくって多文化共生をするというところにも、alaが大きな役割を果たしています。

　それからその上が、最近、特に注目を浴びています。可児市の隣に毎年、途中で転校、退学する子が40人から50人いるという、そういう県立高校がありまして、県の教育委員会が問題視しておりました。そこにalaが提携している文学座の演出家、或いは俳優さんが、新しく1年生になられた方に演劇を通じてコミュニケーション能力を付けるという取り組みを始めました。なんと毎年40～50人いた退学者が10人に減ったということで、今注目を浴びておりますが、こういった取り組みを今まで続けてきたおかげで、昨年の国勢調査で5年ぶりに可児市が人口増に転じたということで、まさに文化による可児市のまちづくり、産業、観光づくりということを進めております。

　東京オリンピック・パラリンピックの機会を利用して、ますますこの取り組みを進めようということで条例もつくりました。そしてその第1弾ということで英国のウエストヨークシャー ・プレイハウスと一緒になって音楽劇をつくって、そこでまた全国に発信しようという取り組みをと思っています。まさに劇場文化芸術を通じた人づくり、地域、観光、産業づくりということを、これからもぜひ進めていきたいと思っております。

　ショートプレゼンということですので、簡単でございますが、以上で可児市のまちづくりの紹介に代えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

佐々木氏　今、ご紹介いただいたように可児市の文化創造センターalaの館長の衛さんも本日来ていらっしゃいますが、大変素晴らしい実践をされています。芸術文化が産業に働きかけて経済効果あるということは、われわれ取り上げてきたことですけれども、例えば非行問題がワークショップ等を通じて解決すると、これによって教育の効果が上がりますよね。こういうのをソーシャルインパクトと言っていまして、イギリス等でも文化予算というのは社会教育的な多面的な効果があるということで、最近非常に研究が進んでいます。11月30日にCCNJの中部のブロックの分科会を可児市のalaでやらせていただきますが、そのときに恐らくそれが大きいテーマになるのだろうと思います。

　私は文化庁が京都に移転する機会に、文化政策研究所をつくってほしいと思っております。そこで文化GDPだとか、或いは文化の社会的インパクト、こういったものを総合的に研究し、そして日本の文化行政を質的に上げる。CCNJがモデルをつくっていく、いいモデルを、それをベストプラクティスとして広げる。これを取り組んでいけば、かなり日本の未来は明るいと考えておりますので、ぜひ可児市、或いはala、頑張っていただきたいと思います。

　さて、門川市長、もう一度出番がありますので、よろしくお願いします。

門川京都市長　ありがとうございます。文化の力で元気になっていこう。この図は、三輪車じゃなしに八輪車のようになりました。趣旨は同じでございまして、この文化庁、今、宮田長官が先頭に、文化庁の機能を強化、こういうことを強力に主張されています。文化が価値を創造し、文化で経済を活性化し、そして人口減少社会、歯止めをかけていく。まさに文化だと思います。

　今、人口減少社会、日本人が経験したことがないといわれています。そのとおりであります。しかし、ちょっと待ってください、京都は経験しました。天皇陛下が、ちょっと行ってくると江戸に行かれた。そのとき京都の人口は33万から21～22万に一気に減りました。京都はキツネやタヌキの住処になるのではないか、このように言われた。そんなときに、明治2年に市民が、町衆が小学校をつくりました。そして明治5年に内国博覧会を開催しました。そのときの余興が「都をどり」であります。観光であります。そして京都市の観光課は昭和の初めにできた。そして明治13年に御所に芸術大学をつくりました。そして明治18年に日本で最初の工業高校をつくった。つまり教育と文化芸術とものづくり、これを最初に取り組んだから人口減少に歯止めをかけて、今の京都がある、このように思います。まさに観光と文化と、経済です。

　京都の特性と書いておりますけれど、これは日本の特性と言ってもいいと思います。伝統産業から先端産業まで、ものづくりであります。この着物、伝統産業であります。ちょっと失礼ですが、このタイツはCW-Xです。ワコールの最先端、歩くまち。イチローが宣伝しています、これも京都です。伝統産業から京セラができる等々、伝統産業から最先端の産業、IPS細胞もできる。こういう京都であります。観光であります。そして何よりも文化は衣食住であります。ヨーロッパは特定の階層の人の文化でありましたが、暮らしの中に文化がある。これが日本の特徴であります。それから景観であります。景観、この字、見てください。日本の京都を見ると書いてあります。景観、徹底して大事にしてきました。日本中で規制緩和の大合唱、そのときに京都は規制を強化し徹底しておりました。そして大学、国際交流、こうしたことを全部、文化を中心におこなったときに、新たな価値を創造し日本を元気にする。頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

佐々木氏　2年前の4月に京都府庁に、今、私がお世話しております文化芸術創造都市振興室が置かれることになりました。門川市長から「ぜひ京都市にも部屋をつくりたい」と言われて、四条烏丸の所に芸術センターにも看板があります。2カ所もありますから、ぜひ皆さまそちらにもお越しください。そういうことで創造都市の手伝いをしておりましたら、いつの間にか京都への文化庁の移転にも巻き込まれることになりましたので、もうしばらくお付き合いをすることになろうかと思います。

　さて、今度は兵庫県の篠山市長、酒井隆明さん、ご登壇ください。よろしくお願いします。

酒井篠山市長　兵庫県の篠山市、丹波篠山と呼んでいただいております。先ほど門川市長が楽しく報告されましたが、篠山市も小京都と呼んでいただいておりまして、全国48ある小京都ですが、この9月に篠山市で全国京都会議をしていただきました。ありがとうございました。

　篠山市は、本日発表する自治体の中でも一番小さなまち、人口4万5千の城下町です。お城跡を中心に、周辺に農村の集落が広がっています。その中に重要伝統的建造物群保存地区の歴史的なまちなみが2カ所あります。丹波焼という焼き物の里でもあります。デカンショ祭り等、地域のお祭りがずっと根付いておりますし、黒豆をはじめ、いろんな農産、特産物に恵まれています。こういったことから昨年4月、篠山市は日本遺産に認定をいただきました。丹波篠山デカンショ節、民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶、デカンショ節という民謡と共に、ふるさとの良さがずっと息づいているまちと認めていただきました。また昨年12月にはユネスコの創造都市ネットワークにも加盟をすることができました。こういったことから篠山市では、歴史、文化、まちなみ、景観、自然、農業、特産、こういった魅力をさらに高めるよう、まちづくりに力を注いでいます。それによってお話がありましたように、活性化に結び付ける、地域の者が誇りを持つ。都会を目指すのではなく、地方の時代だ、篠山の時代だというふうに思って取り組んでおります。

　おかげさまで観光客はずっと増えてきておりますし、また特に今年は丹波篠山城下町ホテルNIPPONIA、これが人気を呼んでおります。城下町の古民家を改修してホテルにする。ホテルといいましても高いビルのホテルではありません。古民家のホテル、これが非常に人気を呼んでいます。

　さて、こういった篠山市、またこういう地方の文化、地方をどのように2020年に合わせて対外的に、特に外国の皆さまにもPRをしていくかということで考えたのが、このお祭り天国というものです。篠山市は小さなまちですけど四季折々、いろんなお祭り、イベントに恵まれております。春は桜の花の散る中で、お能。夏はデカンショ。秋は波々伯部神社の祭礼等、京都文化の影響を受けたいろんなお祭りがある。丹波焼の陶器まつりがある。美味しいものの味祭りがある。またまちなみアートフェスティバル、ササヤマルシェ、これは歴史的な重要伝統的建造物群保存地区のまちなみに近代アート、または美味しいものを並べたりする、こういったことでいろいろ多くの方に来ていただいたりしております。

　またスポーツも全国的な篠山マラソン、全国車いすマラソン、全国桶ット卓球、これは桶でする卓球のことですが、こういった全国大会もしております。また童謡、唱歌も多くの方が親しんでおりますので、こういった四季折々のいろんなお祭り、イベントを、いつ来ていただいても丹波篠山ではこういったものが楽しめる。こういったことで、ぜひPRをしていきたいと思っています。

　この字の横にマークがありますが、これは単なるマークじゃないのですね。デカンショ踊りと豆のさやを描いてあります。ありがとうございました。以上です。

佐々木氏　今、お話になったように、篠山市は人口の小さな、農村の中にあるまちだということで、創造都市ネットワークの中で創造農村という形で小規模な自治体、或いは農村地域の独自のテーマを取り上げたワークショップやっておりますが、鶴岡市さんと並んで、篠山さんは、その創造農村のリーダーとして活躍をいただいておりまして、今ほどユネスコの創造都市ネットワークの認定の話も出されましたが、実は昨日今日と、パリの本部で、ユネスコのクリエイティブジャーニー・トゥー・ジャパンという催しに幾つかの都市が参加されておりまして、市長さんもそちらへ行かれておるのでこちらにおみえになれなかったのですが、篠山市長さんは、あえてそちらに行かずにこちらに来ていただいておりまして、大変ありがたく存じています。

　それでは登壇都市の最後に、満を持して奈良市、仲川げん市長にお願いいたします。

仲川奈良市長　奈良市長、仲川でございます。奈良市の取り組みと、これからCCNJに期待することをお話ししたいと思います。

　先ほど篠田新潟市長様からお話しいただきました、東アジア文化都市事業、これは2011年に奈良市で開催をされました日中韓の文化大臣会合で、これから文化の力で参加国の交流と平和の構築をしっかりやっていこうということで決定をされた事業でございます。この事業、横浜、新潟と来まして、今年が奈良市、来年は京都市さんということで、日中韓3か国で、それぞれ毎年1都市が選ばれ、文化事業に取り組むということでございます。

　今年、奈良市が何をやっているかということにつきましては資料にコンセプトブックを入れておりますので、こちらをご覧いただくと一番お分かりいただきやすいかと思います。そういうことで説明は省略をさせていただきますが、まさに今週の日曜日まで、「」というプログラムの集中期間をやっており、アートディレクターは北川フラムさんにお願いをしまして、世界遺産の社寺で現代美術の作品を展示する。それから今週いっぱい平城宮跡に、文化庁さんに大変ご協力をいただき、野外演劇、維新派の演劇をやっております。ご存知のように今年代表の方がお亡くなりになり、維新派最終公演ということで、今週末までやっております。

　奈良の場の力を生かしたさまざまな企画をやろうということで取り組んでおり、先ほどの宮田長官のお話で言うところの文化の力と観光の力というのは、それなりにあるように思いますが、奈良の場合は経済の力がだいぶ弱いということがございます。奈良市の税収のうち半分弱を占めるのは、実は個人市民税でございまして、なかなか観光や文化で稼げるまちとはなっておりません。文化や観光に経済の話を持ち出すのはなかなかお行儀が悪いと思われるかもしれませんが、やはり地域から人の雇用を生み出して流出を止めていくことは、まちの持続可能性において非常に重要な部分だと思いますので、今、奈良市としては文化と観光というものをしっかりと地域の雇用や税収や、地域の経済発展につなげていこうという取り組みを目指しております。

　そういうことで今年はこういう事業おこなっておりますけれども、奈良の持つ世界遺産をはじめとしたさまざまな文化、なかなか伝わらないというところがまだまだございます。奈良というのは、この間、奈良時代にペルシャ人の役人がいたという、その似顔絵を描いた木簡が出てきました。そういう意味では、非常にインターナショナルな話で、多様性と包摂性、いわゆるインクルージョンとダイバーシティーというのを今、まちの是として掲げております。これは古い話ではなくて現代と、それから未来においても非常に重要なコンセプトだと思っています。それをつないでいくのは、やはり文化の力であろうと思います。異なる価値観、異なる宗教、異なる考え方をしっかりと向き合って、否定をするのではなく受け入れていく、簡単なようではありますけれども大変重要です。これをやはり実現していくには文化を一つ間に挟んで、これからのまちづくりをしっかり進めていきたいと思っております。

　2020年のオリンピック・パラリンピックに向けて、CCNJのように、小さくても地域固有の文化事業をしっかりと積み上げていく。これを4年間で、どれだけ底力を、基礎体力をつくれるかということが、私は2020年に大きく日本が飛躍できるかどうかにかかっていると思いますので、ぜひ加盟自治体の皆さまがたには、その基礎体力の一つとして文化事業にしっかり取り組んでいただきたいと思いますし、それぞれが持つコンテンツをしっかりとつないでいくということで、日本自体が創造都市というか、創造国家になっていくことができると思いますので、ぜひともご協力、よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

佐々木氏　私のまとめの時間を仲川市長に使っていただいたようなもので、もう十分、今、意を尽くしてお話しいただいたと思います。創造都市、創造農村のネットワークというのは、実はこれの先例というのはカナダにありまして、カナダは大変広い国ですから、東海岸と西海岸の都市が毎年行ったり来たりしながら集まって、130ぐらいのネットワークをつくっている。私はそれを調査に行きまして、ぜひ日本でもそういったものが必要だと思いました。そこで当時の近藤誠一長官とも相談をし、それからその前の青木保長官とも相談をして、お二人に顧問を引き受けていただいて、このような形で進んできたと思います。青柳前長官も「大いに、これは強めましょう」と言ってくださっておりまして、この3人の方が現在、顧問を担っていただいております。

　こういう形で創造都市ネットワークが広まってきましたので、実は今日、明日、韓国のほうでも、創造都市ネットワークをつくりたいという機運があって、シンポジウムが行われております。私もそこには呼ばれたのですが、京都にいてCCNJのほうにずっと関わることにいたしました。いずれにしろユネスコのネットワークも日本、中国、韓国が大変東アジアで頑張っているし、それから横浜市がトップバッターで始めていただいた東アジア文化都市事業、これも中国、韓国が、われわれ以上に大変熱心に取り組んでいます。そういったこともあり早い将来に、この東アジアで取り組んでいる文化都市の事業を東南アジア、ASEAN、こちらにも広げていきたい。そうするとアジア全体が平和で安定的な発展になっていきます。そういう中で日本の将来の方向性も、もっと明るいものが出てくると思うのです。ですからこれからは国と国の関係以上に都市と都市、地域と地域の創造的な関係が大事だと思います。BEYOND2020という、まさにそのオリンピック・パラリンピックを一過性に終わらせないで、さらにその先を考えながらネットワークを広げていくということを、われわれは目指したい、そういった意味で本日お集まりいただいて、短い時間でしたけれども意見交換をさせていただき、或いは将来に向けた展望を語り合っていただいたことは、大いに意味があると、よかったのではないかと思っております。

　そこで、この会の締めくくりという形でサミットの宣言を、採択をしたいと思いますので、この提言を、宣言の提案を代表幹事の篠田市長のほうからお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

篠田新潟市長　それでは、これから自治体サミット宣言っていうのを読み上げさせていただきます。

日本全国に感動をもたらした、リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会を終え、いよいよ、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とする文化プログラムが始まります。

　オリンピック憲章では「文化プログラム」の実施について定められており、全国津々浦々での魅力ある文化プログラムの展開を通じて、2020年東京大会をスポーツだけではなく文化の祭典としても成功させる必要があります。

　このため、創造都市ネットワーク日本は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会という大きなチャンスを生かし、文化芸術の力を全国各地で開花させるため、次の取組を強力に推進していくことをここに宣言します。

１．創造都市ネットワーク日本が各地域の文化芸術資源の活用や発信のプラットフォームとなること

２．地域の文化芸術資源を発掘・磨き上げることにより、各地域が挑戦を試み、地域から創造的に発展する新たな活力の創出を図ること

３．地域の文化芸術資源を発信するとともに、国内外の交流を強化し、都市間ネットワークの強化を図ること

　これにより2020年に日本が世界の文化芸術交流のハブとなるという目標に向け、ネットワークを広げるとともに、2020年の先を目指して取り組んでまいります。

　平成28年10月19日、創造都市ネットワーク日本参加自治体、団体を代表して読み上げさせていただきました。拍手でご賛同いただきたいと思います。

佐々木氏　本日の私のほうで担当する議事はこれで終わりですので、あとは司会にお任せいたします。どうもありがとうございます。

司会　佐々木様、ありがとうございました。以上をもちまして、文化庁、平成28年度文化芸術創造都市推進事業、自治体サミットを閉会とさせていただきます。皆さま、本日は誠にありがとうございました。

(了)